

卒業論文作成のための 手引き

【引用編】引用の仕方、引用文献リストの作成方法

引用とはなにか？

引用とは、“自分の説のよりどころとして他の文章や事例または古人の語を引くこと”（広辞苑第五版より）であり、論文を書く際には必ずと言って良いくらい使われるテクニックである。しかし、正しい「引用」をしないと「盗作（剽窃）」と疑われ兼ねない。

【引用編】では、論文作成における「引用」の方法について学び、実際にどのように行うかを確認する。引用の方法如何によっては、卒業論文として受理されない可能性もあるので十分に注意して欲しい。

さて、まずは引用の種類について簡単に見ていく。

アイディア引用

引用元文献の考えや結論などを一度自分の言葉にしてから引用する。「参考」あるいは「参照」と言われることが多い。

上に述べた「肉体なき視線」とは、小説世界を操作する「身体性を欠いた亡霊の視線」と言えようか。自伝のなかで言っているように、生きているうちから死の領域にいるかのように肉体性を消去し観察する視線だけの存在になることをハーディは願っていた。(8)・・・(中略)・・・

(8) Michael Millgate, *The Life and Work of Thomas Hardy*

(Macmillan, 1984) 218

※ 橋本榎矩. ハーディの「亡霊」とはなにか? : 小説から詩へ. 学習院大学文学部研究年報. 2007, No.54, p.37-53. (下

線は筆者)

上記イタリック体の部分は、本論の筆者による引用部であり、下線部の部分は筆者が引用した論文を書いた著者（橋本教授）が「アイディア引用」をしている部分である。(8)の自伝の中で述べられている事柄を、橋本教授が自分の言葉でまとめ直し引用しているのがわかるだろう。

表現引用（直接引用）

引用元文献の文章をそのまま自分の論文内に取り入れて、自分の論理を補強する。単に「引用」と言うと、こちらを指すことが多い。以下にその例をあげる。

谷川氏の表現を引用すれば、「*支配的文化なるものは単一の階級文化で代表されるわけではなく、利害を異にする複数の^{エリート}指導的文化の競合と相互規定による一時的帰結、もしくは流動的態様にすぎず、民衆文化も同様に心性を異にするサブカルチュアが前者の圧力を受けながら錯綜して混在しているのにすぎない。*」(傍点・ルビ原文)

※ 福井憲彦・谷川 稔・原田一美・谷口健治・田中正人・渡辺和行・小林亜子・小山静子・栖原彌生・山田史郎・村上真弓・藤川隆男・常松 洋・小澤英二・松井良明著『規範としての文化-文化統合の近代史-』。史學雑誌, 1991, vol.100, no.9, p.1604-1614.

上記の「」（鍵括弧）で括られた部分が、論文の著者（福井学長）が表現引用している部分である。福井学長は、引用元論文の著者である「谷川氏」が表現した通りに鍵括弧内の文章を引用しているのである。

もう一つ例をあげる。

ここでは自然と世界が調和し、生きとし生けるものがその存在を祝福されている。

How sweet is the Sphepherd's sweet lot!

From the morn to the evening he strays:

(中略)

彼が見守っているあいだ羊たちは平和でいられる、
だって羊たちは羊飼いが近くにいるのを知っているか
ら。

(『羊飼

い』)

牧歌の俚言はギリシアのテオクリトス (Theocritus, 310-250 BC)にまでさかのぼる長い歴史がある。ローマのウェリギリウス・・・

※ 松島正一. 牧歌と無垢：ブレイクの初期の詩. 文學部研究年報. 2006, no.53, p.95-116. (下線は筆者)

長い文章を表現引用する時の例である。イタリック体(本論の筆者が引用している部分)の中で、さらにインデントが下がっている部分(下線部)が表現引用の部分である。ここでは長いので、本論の筆者が(中略)という注記で省略しているが、本文ではもっと長い詩が引用されている。

このように、引用する文章が長く、鍵括弧ではどの部分が引用かわかりにくくなる場合などは、「インデントを下げる」といった手法が用いられることがある。

何故引用か？

具体例まであげて「引用」を説明しなければならない理由はというと、はじめに述べたように正しい引用をしなければ論文として認められないからだ。他者が書いた本や論文には、書いた人に**著作権**が存在し、無闇矢鱈にコピーしたり書き写したりしてはいけないこ

とになっている(著作権法)。ただし、自分の書く文章に「引用」する場合は、以下の例外規定が適用される。

公表された著作物は、引用して利用することができる。

この場合において、その引用は、公正な慣行に合致するものであり、かつ、報道、批評、研究その他の引用の目的上正当な範囲内で行なわれるものでなければならない。

(著作権法第三十二条第一項^{註1)})

この条文があるために、「引用」は当然著作権法に違反することなく行われるのである。

少し堅苦しい話になってしまったのだが、「じゃあ具体的にどうしたら引用と認められるの？」というところが気になる部分であろう。以下に、引用における原則を三つあげる。

(1) 主従関係

気が付いたら自分の論文のほとんどが引用で書かれていた！ではもちろん×。あくまでも引用部分は、自分で書いた文に従属的に関係していなければならない。

(2) 明瞭区分性

具体例を見てもらったように「」(鍵括弧)や“(ダブルクォーテーション)で括る、引用部分のフォントを変える、インデントを下げるなど、その部分が一見して引用だとわかるようにしておかなければならない。

(3) 出典明示

論文などを引用した場合は、必ずその引用した文献の「出典」を明示しなければならない。「出典」とは、要するに引用した図書や論文のタイトルや著者、論文ならどの雑誌に載っているかといった情報のことである。あなたの論文の読者が、あなたが引用した論文の

原本に当たりたい場合、すぐに見付けられるようにしておく、という意味がある。

引用の意義とは？

さて、では何故、論文を書くときに「引用」が行われるのだろうか。ここでは、引用の意義について Q&A 方式で参照したいと思う。

Q. そもそもなぜ引用するの？

A. その道の大家と呼ばれる研究者でも、何も参照せず新しい理論を発表するのは困難。過去を踏襲した上で（理論と理論の隙間や、それらの組み合わせなど）、過去には見付けられなかった新しい理論が生まれるのである。

Q. 引用は絶対しなきゃだめ？

A. 上述してあるが、必ずしなければならないと言うよりは、過去の研究（いわゆる先行研究）を確認しないことには論文は書けない、ということだ。論文の「オリジナリティ（新規性）」と「過去を踏襲しないこと」を混同してはいけないのである。そのテーマについて、過去にどんな研究がされてきたのか確認するのが研究の第一歩である。したがって、引用についても、論文には必要なファクターであるといえる。

Q. そりゃ、何冊かは本を読んだけど・・・

A. 何を参考に論文を書いたか正直に引用しないと、盗作あるいは剽窃となり得る（それが一般に言われている「既知の事実」だったら引用せずとも良いとされているが、一般に研究では、他人の考えを勝手に使用するのはタブー）。もしあなたの書いた卒業論文が盗作、剽窃と認定されたら、単位の剥奪だってあり得る。

（灰色文献^{註2}であったとしても例外ではない）

Q. でも新規性を打ち出すべきでしょ？

A. もちろんそうなのであるが、ただ、あなたはその道のプロではない。あなたが思い付いていることぐらい、既に他の研究者が思い付いているはず。また、あなたが「Aだと考える」「Bと言われている」と書いたところで、その信用度は限りなくゼロに近い。したがって、その道の先駆者の言葉を借りて、理論武装するというのが引用である。「Aだと考える。これはC氏がDで述べていることと符号する」「D氏やE氏、またはF氏によって、Bと言われている」など。

Q. 他にどんなことに注意しなければいけないの？

A. 基本的には、研究上必要と思えば何から引用しても構わない。最近では、インターネット上の情報を引用する人も増えているが、これらから闇雲に引用するのはあまりオススメしない。良く言われることだが、インターネット上の情報は「玉石混淆」であるため、その情報を精査する目を持っていないうちは図書や論文を引用の方が無難である。例をあげれば、Wikipediaは果たして信頼できるソースなのか、という問題がある。学術的には、まだまだ信頼性の点で賛否両論があるため、冊子体の百科事典（や、それをもとにしたオンラインデータベース）を使用すべきであろう。

出典明示の仕方

引用したら、出典明示と上述してあるが、ここでは、その出典明示の方法を見ていこう。別段難しいことではないが、これも間違えるとあなたの論文の読者が原本を参照できないという事態になり兼ねないので、十分に注意して行って欲しい。以下に手順を明記する。方法は幾つかあるので、ここで紹介した方法にこだわる必要はない。

- ▶ 引用した部分の後ろに連番を振る
- ▶ 連番の通りに、巻末にリストをつける

これがもっともベーシックな方法である。もう一つ紹介しておく。

- ▶ 50音順の引用文献リストを予め作成する
- ▶ 引用した部分の後ろに括弧書きで著者名と年号を振る ex. (John Doe, 1992)
- ▶ 同じ著者名で年号も同じ文献があった場合は、年号の後ろに a, b, c・・・をつける
 - ▶ ex. (John Doe, 1992a) (John Doe, 1992b)

参照する文献が多い場合は、50音順（あるいはアルファベット順）のリストを作成することがある。リスト作成の方法は自由だが、一つの論文の中では統一しておく必要があるだろう。

次に、引用文献リストを作成する方法を示しておく。基本形態は次の通り。

- ▶ 図書の場合
 - ▶ 著者名 『タイトル』 出版社 出版年 ページ数
 - ▶ Author. Title. Publisher, Public Date, Page
- ▶ 論文の場合
 - ▶ 著者名 「論文タイトル」 『雑誌タイトル』 出版年 巻号 ページ数
 - ▶ Author. "Article Title". Journal Title. Public date, vol., no., Page.

他にも Web ページや新聞の出典明示の方法もあるが、ここでは割愛する。気になった方は、次に紹介する SIST02 を見て欲しい。

SIST02

SIST (Standard for Information of Science and Technology) とは、科学技術文献の流通を円滑にするために設けられた統一的基準のことである。一つの指針であるので特に従う義務等がある訳ではないが、何かと便利なので

知っておいて損はない。その中の二番目、「SIST02」とは、出典の書き方についての統一基準（を指しているもの）である。図書や雑誌論文だけではなく、新聞や特集記事、Web ページ（補遺版）なども網羅した優れた基準である。筆者の論文はすべて SIST02 で出典明示している。2007年3月の改訂によって、筆者が論文を書いた頃よりさらに分かりやすくなっている。

詳しくは、下記のウェブページを参照のこと。

- ▶ http://sist-jst.jp/handbook/sist02_2007/main.htm

出典明示のアドバイス

出典の明示方法には、SIST02のように統一的に運用しようとするものもあるが、基本的に「これ」と決まったものはない。著者、タイトル、出版社、出版年、ページ数など、引用した文献が確実にわかる情報を載せてあり（かつ、それが何の情報かが分かり）さえすれば基本は押さえられる。ただし、いくら決まった形がないからと言って、自分の書いた論文内くらいは統一的な書き方をして欲しい。

では、何に統一したら良いのか。迷ってしまう人も居るかもしれないので、間違いのない選択肢をあげておこう。

- ▶ 指導教官の論文を読んで、引用文献リストを見て、それを真似る
- ▶ その研究分野の権威雑誌（コア・ジャーナル）に従う
- ▶ SIST02に従う

引用文献として集めた図書や論文の引用文献リストを良く見て、最適と思う方法を選ぶと良いだろう。

註1 著作権法

余談であるが、著作権法第三十一条では、「図書館」のコピー機による複写が、条件を満たせば違法ではないと規定されている。条件については、図書館内のコピー機前に貼ってあるポスターなどを参照して欲しい。

註2 灰色文献(Gray Literature)

“流通の体制が整っていないために、刊行や所在の確認、入手が困難な資料。政府や地方自治体などの審議会資料および報告書。テクニカルレポート、プレプリント、会議資料、学位論文などには、灰色文献と呼べるものが多い。”（『図書館情報学用語辞典 第三版』より）このようにあまり人目に晒されない文献でも、参考にした場合は正直に書かないといけないのである。

平成21年6月25日

学習院大学図書館 卒論準備セミナー
